

成台遺跡

第二次発掘調査報告書

2004

新潟県三島郡越路町教育委員会

成 台 遺 跡

第二次発掘調査報告書



2004

新潟県三島郡越路町教育委員会

序

成台遺跡は昭和56年（1981）に、越路町の「農村地域定住促進対策事業」による「農村運動広場」の造成工事に伴い、第一次発掘調査が行なわれ、翌年その報告書が刊行されている。この報告書は、台地全域約8万m²のうち136区画・544m²の試掘調査と東・中央・南地区における本発掘調査（）の結果についてまとめたものである。

その後、この地に「特別養護老人ホームこじじの里」の建設（平成10年開所）が行なわれることとなり、平成9年（1997）に第二次発掘調査が実施されたが、諸事情により、この度ようやく報告書発刊の運びとなったものである。なお、昭和62年（1987）年に「こじじの里」の東隣に「越路B&G海洋センターブール」と管理棟及び駐車場が建設されている。

ここ成台の地は、本報告書中にも記述のとおり、「成台」と書いてナリデ、ナルデ、ナルティなどと呼ばれていたが、私の住む岩田地域ではナルデと呼称することが多く、時にはナッデなどとも呼ばれていた。平地でよく肥えた土質は畑作に適しており、集落からも程よい距離とあって古くから不動沢や岩田（上岩田）地域の大手な野菜畠であり桑畠であった。春耕の頃ともなると、この台地のあちこちで鍬をふるう村人の姿が見られ、時には掘り起こした土の中から土器片が出ることもあった。

成台遺跡は洪海川がつくった河岸段丘の上に位置しているが、この台地の標を流れる洪海川は暴れ川でしばしば洪水が発生し、村人が苦しめられた記録が「越路町史」にも記載されている。文政年間には台地の西側を掘り削って瀬替が行なわれ、また、明治30年代には北陸鉄道（現JR信越線）の開通のために東側を、昭和の初めには県道の建設で西端をそれぞれ掘り削って現在に至っている。

古くは、台地の東、越路原への緩やかな傾斜地に浅井一族が住んでいたという伝承があり、『正保国絵図』にも「成出村14石」と記されている。『元禄郷帳』が作成された元禄15年（1702）時点では、成出村は不動沢村に統合されている。さだかではないが、浅井一族は不動沢村とのトラブルで西谷地区の木和田久保の地に移ったと言われている。

第二次発掘調査は、前回の試掘調査以後「保存地区」として約15年ほど放置されていた区域の調査であつたため、スキや樹木が繁茂していて調査には困難であった。調査では遺構215基と遺物15点が確認された。これらの帰属時期から、この遺跡の主体時期は中世と考えられ、また、遺構の配列関係などから遺跡は当該時期に営まれた小規模な集落跡、或いはむしろ出小屋的な施設の跡ではないかとも推測されるが、今後の課題として次期の調査に委ねたいと考える。

この台地は、まだ活用されていない部分が多く、今後の活用が待たれるところである。なお、昨年10月に発生した「新潟県中越大震災」によって崖の一部に崩落があったが、台地南側崖の「不動沢（成出）向斜構造露頭」や台地上の建造物にはほとんど被害がなかったことは幸いであった。

おわりに、県文化行政課ならびに関係各位、発掘調査に関わられた方に衷心よりお礼申し上げ、発掘調査報告書発刊のごあいさつといたします。

平成17年2月

越路町教育委員会

教育長 丸山 武士

例　　言

1. 本書は、新潟県三島郡越路町大字不動沢字成出5580番地8ほかに所在する成台遺跡第2次発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、町道701号線拡幅工事に伴うものであり、遺跡範囲確認調査と本発掘調査を並行して実施したため、調査費用は国・県・越路町教育委員会の三者で負担した。
3. 出土遺物の註記は遺跡略号（ND）と調査年度（98）とを組み合わせて「ND98」とし、出土地点や遺構名を記入した。
4. 遺構番号は、ピット：p 土坑：SKとも記号の後に通し番号を記した。
5. 遺構平面図は平板測量で作成した。
6. 本書は本文と巻末図版（図版・写真図版）とで構成される。
7. 本書の執筆・編集は、新田康則（越路町教育委員会）が行った。ただし、第Ⅲ章については、石坂圭介（有限会社ベンタラボ／前・越路町教育委員会）の原稿を元に新田が編集した。
8. 文中の注釈は頁ごとの脚注とし、引用がある場合はここに出典を示した。
9. 陶磁器については、安藤正美氏（見附市教育委員会）から御教示を賜った。
10. 純文土器および土師器の色調表記は、農林水産技術会議事務局編『新版標準土色帖』（1996年後期版）に準拠した。
11. トピラに掲載した俯瞰地図は、杉本智彦氏作成の3D地図ナビゲーター『カシミール3D』を使用し、国土地理院発行『数値地図50mメッシュ（標高）日本II』を加工して作成した。
12. 本報告書の内容は先行する全ての報告・記載に優先する。
13. 調査の体制は以下の通りである。

（平成9年度：発掘調査）

調査主体	越路町教育委員会	教育長	佐藤周一
事務局	越路町教育委員会	竹内正夫	（事務局長）
		金子修	（社会教育係 係長）
調査担当		石坂圭介	（社会教育係 主事）
発掘作業員	大塙静子・金子正弘・陶山辰雄・高橋一郎・西澤俊助・西澤強・平石剛・ 深井秀子・丸山忠吉・吉岡昭登・渡辺利幸・山崎朋子		
整理作業員	丸山京子		

（平成16年度：調査報告書作成）

事務局	越路町教育委員会	田中正明	（事務局長）
		小野塙了	（社会教育係 係長）
調査担当		新田康則	（社会教育係 主事）

14. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なる御教示・御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。（あいうえお順・敬称略）

安藤正美・金子拓男・神林昭一・北村亮・駒形敏朗・佐藤雅一・田村浩司・永井桃代・長澤展生
飯塚集落・沢下条集落・不動沢集落・元町町内会・新潟県教育庁文化行政課

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 第1次調査と保存区域	1
第2節 第2次発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	2
第1節 遺跡の位置	2
第2節 渋海川流域の遺跡	2
第Ⅲ章 調査の方法と経過	4
第Ⅳ章 調査の成果	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 基本土層	6
第3節 遺構	6
第4節 遺物	6
第Ⅴ章 まとめ	9

挿図・表目次

第1図 調査対象範囲	1
第2図 渋海川流域の主な遺跡	3
第3図 遺跡周辺の地形	3
第4図 調査区設定図	5
第5図 土層柱状図	7
第6図 遺構全体図	7
第7図 SK1実測図	7
第8図 遺物実測図	8
第9図 建物配置推定図	9
第1表 作業工程表	5
第2表 遺物観察表	8

第Ⅰ章 調査に至る経緯

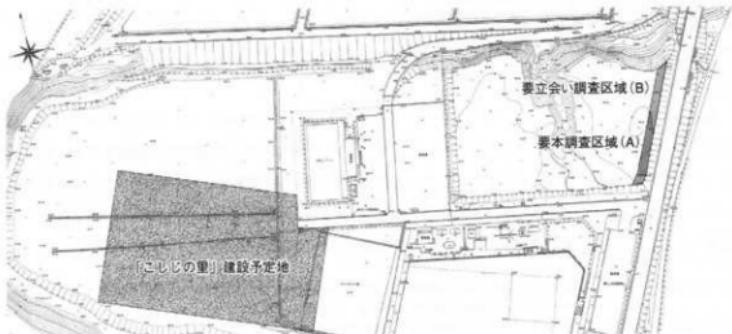
第1節 第1次発掘調査と保存区域

成出の台地は古くから遺物採集地として広く知られていたが、埋蔵文化財行政上の周知化がなされたのは、昭和48年（1973）のことである。神林昭一氏の精力的な表面調査によって、およその遺跡範囲が推定され、「成台遺跡」と命名された¹⁾。昭和56年（1981）、この地は「農村地域定住促進対策事業による農村運動広場」建設候補地となり、新潟県教育委員会が台地全域約80,000m²を対象に遺跡確認試掘調査を実施した結果、約20,000m²の範囲に遺跡の包蔵が確認された。その調査結果に基づき「現状保存区域」と「記録保存区域」とが設定されている。同年10月、越路町教委員会は「記録保存区域」のうち約2,200m²を対象とした本発掘調査を実施した²⁾。そして、成出の台地は「現状保存区域」約9,100m²を残し、掘削深約4mという大規模工事により、その姿を大きく変えることとなる。

第2節 第2次発掘調査に至る経緯

平成8年（1996）、特別養護老人ホーム「こしじの里」の建設が計画された。これに伴い、埋蔵文化財の取り扱いについて、越路町役場建設課と保健福祉課（開発部局）および越路町教育委員会の三者により協議が進められた。施設の建設予定地は先の開発により既に遺跡が埋滅していた。しかし、全体計画の中には、大型工事車両の乗入道路確保を目的とした用地に隣接する町道701号および用地内の既存道路の拡幅工事が含まれていた。この範囲は前述の「現状保存区域」にかかるものであった。

町教委は、昭和56年6月の試掘調査成果を再検討し、開発区域を（A）「要本調査地区」（遺跡が確認されている範囲）と、（B）「要立会い調査地区」（遺跡範囲外ないし極めて希薄な範囲）とに分類した。これを基に協議を重ねた結果、工事計画が町道部分に限定するよう変更され、（A）については本発掘調査、（B）についても慎重を期して遺跡範囲確認調査を実施することを決定した。



第1図 調査対象範囲 ($S = 1/3,000$)

- 1) 遺跡の名称については、第Ⅱ章を参照のこと。
- 2) 遺跡確認試掘調査から、第1次本発掘調査までの経緯・経過については、下記文献を参照のこと。
羽形敏朗 1982 「成台遺跡調査報告書」越路町文化財調査報告第8編 越路町教育委員会。

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

第1節 遺跡の位置（第2・3図）

成台遺跡は、渋海川によって形成された舌状台地に立地している。この台地は、後期更新世の段丘堆積物（成出面）が魚沼層群の向斜構造（不動沢向斜）を頗る不整合で覆うことにより形成されている¹⁾。段丘面の離水期は約30,000年前であるとされる。

今もなお成出の台地を削りつづける渋海川は、東頸城丘陵に端を発し、小国盆地を抜けて越路を通り信濃川に合流する。その姿は、文字どおりヘビがのたうつ様であり、上流から下流まで激しく蛇行している。こうした特徴から、渋海川は暴れ川として幾多の洪水を引きおこしてきた。近世から明治期にかけて積極的に漁港が行われ、河道の直線化が計られたのはこのためである。成台遺跡の立地するこの台地も、文化・文政年間の「不動沢成出掘削」によって東西に寸断されたものの²⁾、旧河道は対岸の台地の西をさながら“ヘアピンカーブ”的に流れている³⁾。

また、遺跡が立地する地域は、「成出」と書いて「ナリデ」・「ナルデ」・「ナルディ」などと呼びならわされている。天和3年（1683）『越後國三島郡不動沢村御模地水帳（写）』⁴⁾には、「なるいではた」という記載があり、『土地更正図』における小字名は「成出（ナリデ）」である。一方、遺跡の名前は「成台（ナルデ）」である。一説には「ナルダイ」と聞き違えたまま、その音に漢字が当てられたことに由来すると伝えられているが、「成台」という遺跡名は、こうした捩じれを内包しているのである。

第2節 渋海川流域の主な遺跡（第2図）

城・城館跡 小坂城跡（1）・中山城跡（2）は渋海川左岸の河岸段丘上（成出面）に構築された戦国期の城郭である。周辺地域の支配のみならず、渋海川の水運にかかわりがあったものと考えられる。さらに、八石山地系の尾根上には、いくつかの山城が点在している。勝平城（3）・十二砦跡（4）・不動沢城（5）は、室町後期～戦国期の山城群であり、三者が連繋して機能していたと推測されている⁵⁾。岩田城（6）は、その構造から南北朝期に帰属する山城であろう。また、本条館跡（7）は、町史編さんとの折、土地更正図の調査によって発見された城館であり、白山神社の神官大川氏の屋敷であったと推測されている⁶⁾。

包蔵地・散布地 掘削によって切り離された成出台地の西側に上向遺跡（8）が立地する。表面調査によって確認されたため全容は明らかでないが、成台遺跡との間に空間的連続性が想像される。小坂遺跡（9）は渋海川左岸の段丘（岩田面）に立地した绳文時代の集落跡である。岩田遺跡（10）も左岸段丘上（岩田面）に営まれた集落跡である。9世紀前半に比定され、渋海川水運も含めた主要交通路をにらんだ集落であったと推測されている⁷⁾。また、善福寺遺跡（11）や勝願寺遺跡（12）は寺院跡と推測されている。

1) 小林雄雄 1993 「越路町渋海川の魚沼層向斜構造—不動沢向斜—」新潟県環境保健部環境保全課編「統・新潟のすぐれた自然」地形・地質編 新潟県。103-105頁。

2) 越路町教育研究会編 1973 「越路のあゆみ」 越路町教育委員会。53頁。

3) 柳恒雄 1998 「渋海川の蛇行と漁港」『越路町史』資料編1 越路町。16-17頁。

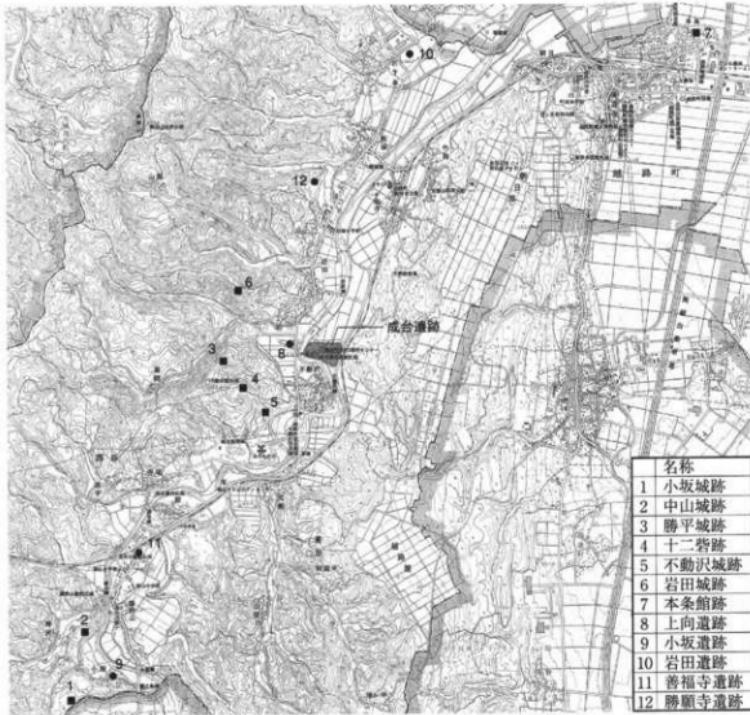
4) 酒井洪一氏所蔵文書。

5) 鳴海忠夫 1998 「勝平城」 越路町編「越路町史」資料編1。379-392頁。

6) 鳴海忠夫 1998 「本条館跡」 前掲註5 文獻。360-361頁。

7) 石坂圭介・佐藤雅一 1992 「岩田遺跡」 越路町教育委員会。

石坂圭介 1997 「岩田遺跡第二次発掘調査報告書」 越路町教育委員会。



第2図 津海川流域の主な遺跡 ($S=1/50,000$)



第3図 遺跡周辺の地形 ($S=1/10,000$)

第Ⅲ章 調査の方法と経過

調査の準備 調査対象地は旧来畠地であったが、昭和56年（1981）の試掘調査以後、「保存区域」として約15年間放置されていたため、樹木が鬱蒼と繁茂する土地となっていた。したがって、平成9年11月下旬、現在の崖線から20mの範囲に生育している樹木をチェーンソーで伐採し、調査範囲と廃土を出すためのスペースを確保した。

12月5日、バックホーで調査範囲の表土剥ぎを実施した。しかし、地中深くまでスキの根が食い込んでおり、これを重機で掘削すると包含層を破壊する恐れがあるため、明らかな盛土のみを除去した。この作業は一日で終了した。

同日、開発側の測量業者と現地踏査を行ったところ、昭和56年（1981）に実施した試掘調査および本発掘調査の基準杭が一部残存しているのを発見した。測量業者に協力を依頼し、これを用いて当時の調査グリッドを復元し、前回と同様のグリッド（50m方眼大グリッド・10m方眼中グリッド）を設定した。杭打ち作業は12月8日に実施している。また、本格的な発掘調査の開始に先立ち20cm弱の積雪を見たため、10日に除雪作業を行った。

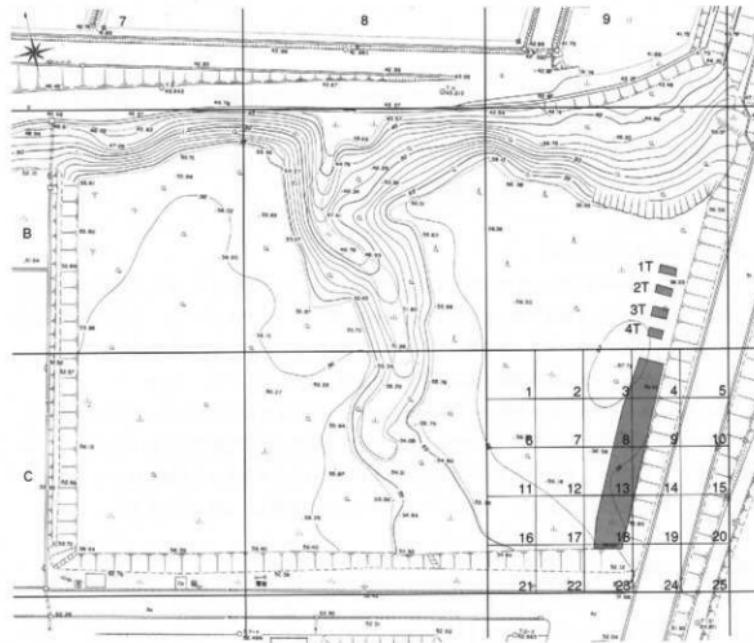
発掘調査 12月11日より、残った表土以下を人力で掘り下げ始めた。やはりスキの根に邪魔され土層の観察が難しく包含層の検出に難渋した。この人力による掘削を2日間続けると包含層ではなく明瞭な地山層に達した。この結果、町道側南半については既に包含層が破壊され、表土の直下から地山が露出することが明らかとなった。これは保存区域として整地する際に誤って包含層を削平してしまった可能性が指摘される。また、保存区域内各所に残された昭和56年の試掘トレンチの断面を観察すると、包含層が削平されたのは主に町道側南半に限定されており、他の部分では包含層が残存している状況が確認できた。

地山を精査していくと、本発掘調査範囲の南側で夥しい数のピットが確認された。よって、同月16日より北側表土の掘り下げと並行してピットの調査を開始した。これに対して本発掘調査範囲の北側は包含層が若干残っているにもかかわらず検出遺構が希薄であり、わずかに倒木痕と土坑1基が発見されるに留まった。また、出土遺物は調査区域全般を通して僅少であり、青磁3点と土師質土器12点、計15点が出土したのみであった。これらの人力による表土剥ぎ作業は19日には終了し、遺構の掘削は、12月23日には終了した。

実測図等については、まず遺構の確認状態図を縮尺1/100で作成した。これは方眼紙にグリッドと調査範囲を書きそのなかにピットの位置と大きさをメモしていったもので、主に遺構番号を管理するためのものである。これは人力による掘削作業と並行して行った。また、正式な実測図に関しては、遺構全体図を平板実測で縮尺1/30の図面を作成した。そして、(A) 北側で確認された土坑については、簡易やり方実測で縮尺1/20の平面図と断面図を作成した。他のピットについては、断面図を作成していない。これらの遺構実測作業は、遺構完掘後の12月24日～27日および1月12日に行った。記録作業終了後、後片付け等の撤収作業を行ない、発掘調査を完了した。

遺物は遺構一括で取り上げ、ラベルに出土遺物名を記した。また、写真撮影は35mm一眼レフカメラ1台で行った。フィルムはカラーフィルムを基本とし、一部白黒フィルムを併用した。

整理作業 基礎整理作業は平成10年1月下旬～2月にかけて実施した。その後期間を置き、平成16年10月から報告原稿執筆および図版作成を行った。



第4図 調査区設定図 ($S=1/1,000$)

	1997			1998	
	11月		12月	1月	
伐採・除雪・表土剥ぎ					
確認調査					
包含層調査					
遺構調査					
記録図作成					

	1999		2004	
	2月	10月	12月	
遺物洗い				
註記・分類・計測				
実測図・写真撮影				
図版作成				
執筆				

第1表 作業工程表

第IV章 調査の成果

第1節 概要

今回の調査範囲は、成出台地上に形成された開析谷の東に位置する活動痕跡の東端であると推測される。発掘調査によって、遺構215基（土坑1基・ピット214基）、遺物15点の出土を確認している。これら遺物の帰属時期からみて、遺跡の主体時期は中世（14～15世紀）であろう。また、遺構の配列関係などからみて、遺跡は当該期に営まれた小規模な集落跡だと推測される。

第2節 基本土層（第5図）

前述した通り（第III章参照）、調査区域の南半は包含層が削平を受け、表土層の下には黄褐色風化火山灰層が確認されるという状況であったため、土層観察面を得ることができなかった。一方、調査区北側の確認調査区域では4本のトレンチを配置し（第4図）、良好とは言い難いものの、遺物包含層が残存していた。このため、今回は確認調査区域で確認された土層面を基本土層とした（第5図）。

土層は表土層・黒褐色土層・漸移層・黄褐色風化火山灰土層の4層に分層された。黒褐色土層は2Tで僅かに確認できただけであるが、昭和56年（1981）の試掘調査および本発掘調査における「第II層」に、漸移層は「第III層」に、黄褐色風化火山灰土層は「第IV層」に対応するものと推測される¹⁾。したがって、基本土層を設定するにあたり、昭和56年（1981）の層位名を踏襲し、これを使用した²⁾。

第3節 遺構（第6・7図 図版1）

調査区南半（C9-13区・14区・18区）にピットの集中区域が確認されている。このピット群は192基のピットによって構成されているが、遺構覆土から出土した遺物の帰属時期からみて、14世紀後半から15世紀にかけて形成されたものと推測されよう。この中から4つの建物配置を捉えることができた。また、遺物が確認されたのは12基であった。

これらピット群から離れた位置にSK1が位置している。この土坑は、調査区北側・C9-4区で検出された遺構である（第7図）。平面形状は、長軸138.0cm・短軸111.6cmのややいびつな梢円形を呈している。断面形状は台形状を呈し、その最深部は22.4cmとなっている。遺物出土は確認されていない。

第4節 遺物（第8図）

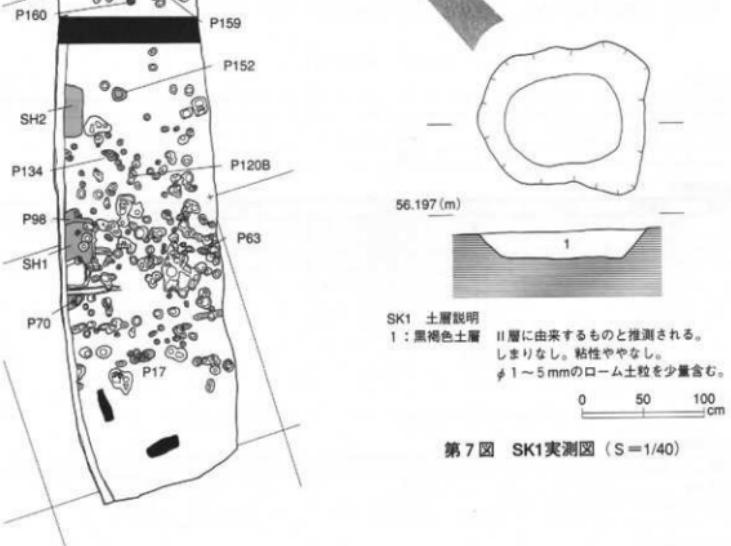
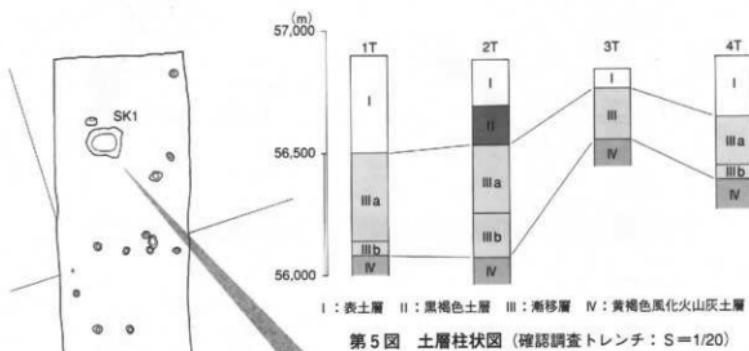
中世の遺物 この時期に帰属すると推測される遺物は15点（青磁3点・土師器12点）である。このうち2点を図化・報告したい。1および2は青磁の碗である。高台内および疊付まで釉薬が施されており、露胎部分がない。釉の厚さは約0.6～0.9mmで、ほぼ均一である。貢入はあまり顯著ではない。

表探資料 調査区域ではこの他、縄文時代の遺物5点が表探されている。2～4は恐らく中期の土器である。5は「凸基有茎縄」³⁾である。頁岩製の剥片を利用している。周縁から二次加工が施されているが、剥離が浅く、裏面と主要剥離面が残存する結果となっている。

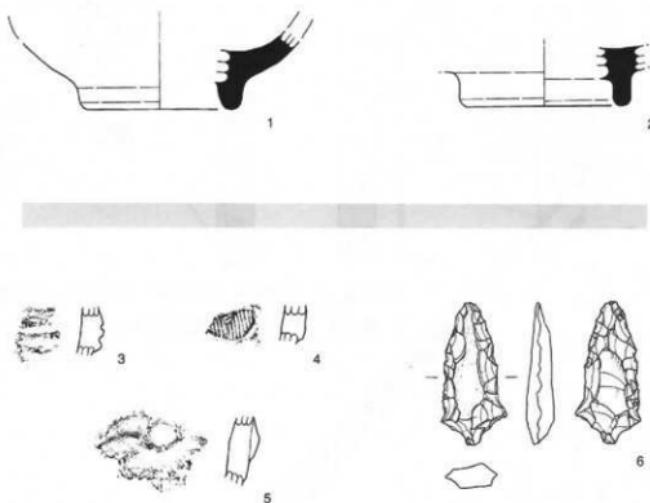
1) 胸形敏朗 1982 「土層序」「成台遺跡調査報告書」越路町文化財調査報告第8輯 越路町教育委員会。6頁。

2) ただし、今回の調査では、漸移層を上下2層に分層し、それぞれ「第IIIa層」・「第IIIb層」としている。

3) 鈴木道之助 1991 「国録・石器入門事典（縄文）」柏書房。44頁。



第6図 遺構全体図 (S=1/200: 網かけは遺物出土遺構を示す)



第8図 遺物実測図（上段：出土遺物、下段：表探遺物 縮尺 1～5：S=1/2 6：S=4/5）

第2表 遺物観察表

磁器観察表

団版	註記番号	時期	種別	色調	胎土	厚さ(cm)	重量(g)	備考
8-1	P98A	14C後半	碗	青磁		1.0	48.38	
8-2	P159	15C?	碗	青磁		1.0	8.34	
	—	15C?	碗?	青磁		0.9	9.15	

土師器観察表

団版	註記番号	時期	区分	色調	胎土	厚さ(cm)	重量(g)	備考
SH1			A類?	にぬ-黒5786/4	白・赤・灰	0.7	3.48	
SH2			A類?	にぬ-黒5786/4	赤・灰	0.6	7.74	
P17			A類?	にぬ-黒5786/4	白・赤・灰	0.6	7.08	
P63			A類?	にぬ-黒5786/2	白・灰	1.0	2.88	
P70			A類?	にぬ-黒5786/2	白・灰	0.7	5.88	
P120B			A類?	にぬ-黒5786/2	灰	0.2	0.31	
P120B			A類?	にぬ-黒5786/4	白・灰	0.6	1.58	底部
P134			A類?	にぬ-黒5786/4	白・灰	0.3	0.34	
P132			A類?	にぬ-黒5786/2	白・赤・灰	0.4	0.45	
P160			A類?	にぬ-黒5786/4	白・灰	0.4	0.79	

*土師器の区分は下記の文獻に準拠した。

品田高志 1997 「越後国における土師器の変遷と諸相」『中世の北陸—考古学が語る社会史—』北陸中世土器研究会。

縄文石器観察表

団版	註記番号	時期	部位	文様要素	色調	胎土	厚さ(cm)	備考
8-3	—	中期?	頭部	沈錐	考5786/6	白	1.0	
8-4	—	中期?	頭部	沈錐	にぬ-黒5786/4	白	1.1	
8-5	—	中期?	口縁部	縦文+貼付	にぬ-黒5786/4	白・赤	1.1	

縄文石器観察表

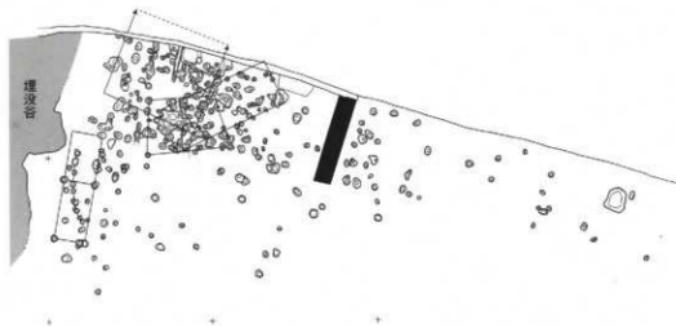
団版	註記番号	器種	石材(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
8-6	—	石錐	貝岩	3.66	1.38	0.64	3.81	
	—	剥片	ガラス質安山岩	3.24	2.43	0.54	3.90	

第V章 まとめ

最後に建物配置の検討を通して遺跡の性格を考えたい。前章で述べた通り、遺物の帰属時期が14世紀後半～15世紀であると推測されるため、これを遺跡の主体時期と見做す。また、発掘調査において判然とした建物配置を見出すことは出来なかつたため、当該期の集落・城館研究を下敷として柱穴の配列関係を抽出し、検討材料とする。また、今回実施した第2次調査区域と、昭和56年(1981)に実施された第1次調査東側調査区は隣接(一部重複)しており、両者を対象としたい。

中世集落研究は、1980年代末以降北陸地方を中心に進められているが、中世後期においては越後の様相も北陸と大差ない状況であるとされる。河西健二は柱穴規模や小屋組み構造により中世後期を3段階に区分しており、本遺跡が該当すると推測される第1段階(14世紀後半～15世紀前半)においては、総柱建物が規模縮小(柱間の短縮化・梁柱間の拡大化)し、円形柱穴による梁行1間の側柱形態になると指摘している¹⁾。また、鈴木和子は、中世前期において総柱建物が主体であったが、後期においては側柱建物が増加するという変化を指摘している。特に越後においては、中世前期から既に側柱建物主体の傾向が強いといいう²⁾。

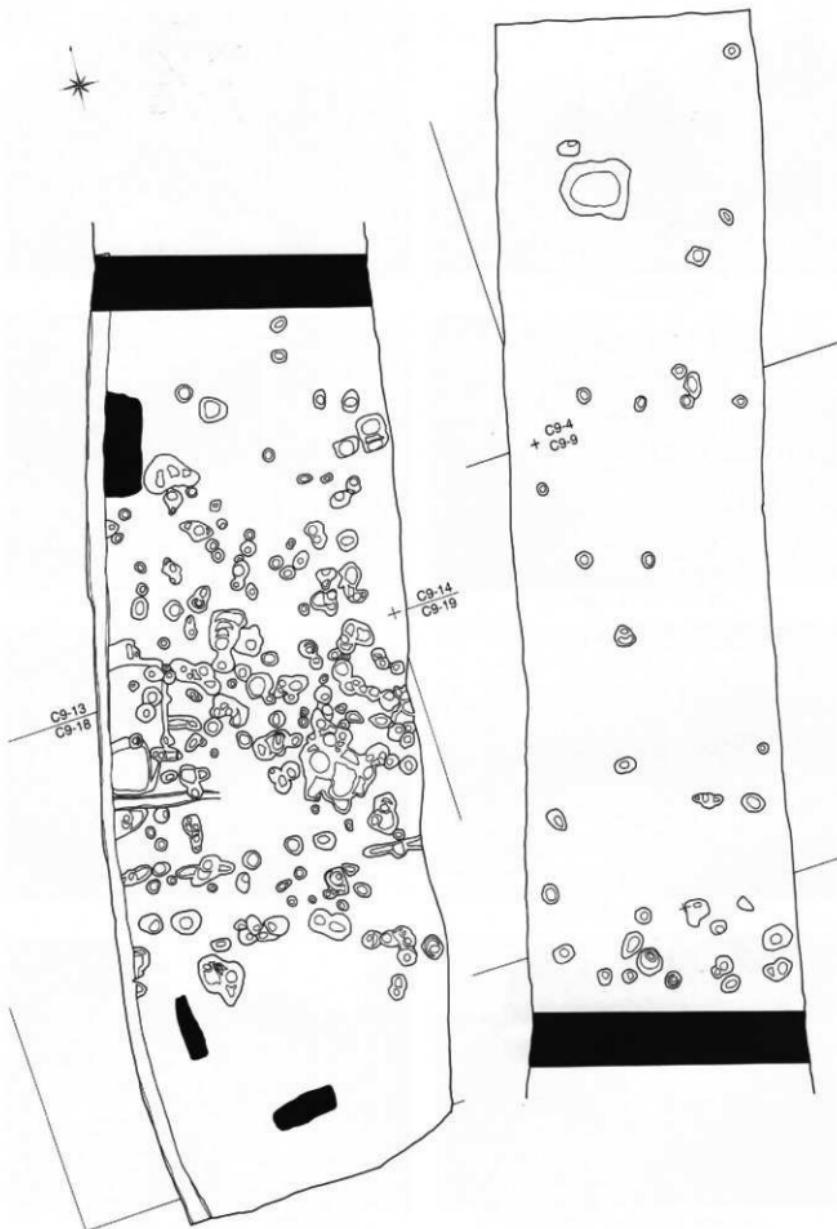
このように、先行研究からは円形柱穴をもつ側柱建物が主体となるという時期相が示され、これを元に建物配置の抽出を試みたものが第9図である。4つの配列を抽出してみたものの、これら配列が重複しており、区画性や企画性を感じ取れない。したがって、城館はもとより集落形態というものを看取できず、狭小な範囲が度重なって使用された状況が想定される。また、新潟県内において14～15世紀には溝状遺構を伴った「集村の景観」が出現するという指摘³⁾を踏まえると、現時点では調査域には集落が存在していたとは考え難い。更に地形的要素を勘案すると、むしろ出小屋的な施設が営まれていた可能性が高いと言わざるを得ないだろう。今後の課題としたい。



第9図 建物配置推定図 (S=1/300)

- 河西健二 1994 「中世末から近世の建物」「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告書(遺構編)」
- 鈴木和子 1995 「北陸における中世集落の構造—遺構の類型的検討を中心として—」(富山大学人文科学研究科修士学位論文)
- 利根与八郎 1999 「総論」新潟県考古学会編『新潟県の考古学』 高志書院。359～362頁。

図版1 遺構全体分布図 (S=1/100)



写真図版 1



調査区近景（南から）



確認調査・作業状況



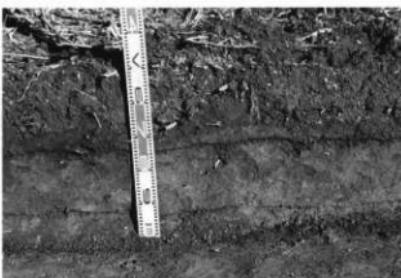
確認調査 1T・土層堆積状況



確認調査 2T・土層堆積状況



確認調査 3T・土層堆積状況



確認調査 4T・土層堆積状況

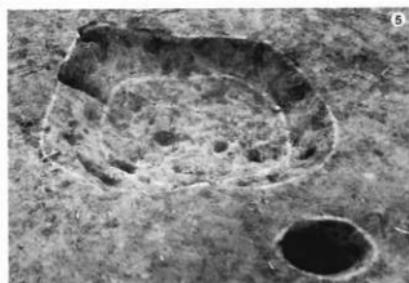
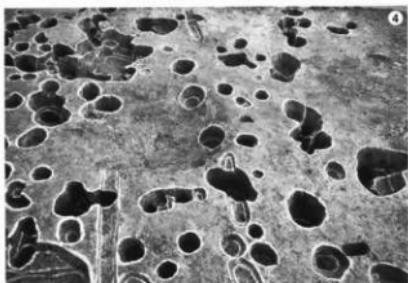
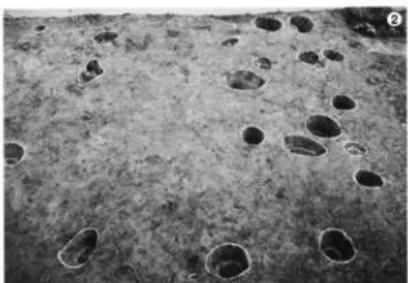


本発掘調査・作業状況①（包含層掲削）



本発掘調査・作業状況②（遺構の調査）

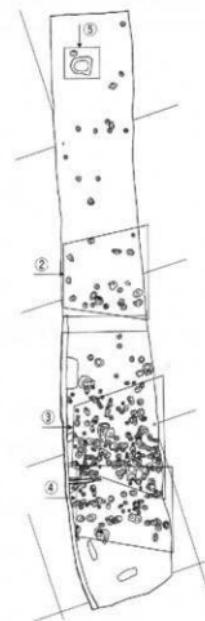
写真図版 2 (遺構と遺物)



SK1 完掘状況



出土遺物



報告書抄録

ふりがな	なるでいせき だいにじ はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	成台遺跡第二次発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	越路町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第25輯							
編著者名	新田康則・石坂圭介							
編集機関	越路町教育委員会							
所在地	〒949-5493 新潟県三島郡越路町大字浦715番地 TEL0258-92-5910							
発行年月日	2005年2月28日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
成台遺跡	新潟県三島郡 越路町大字不動沢 字成出5580-8外	15-401	1	37° 22' 16"	138° 44' 56"	1997.12.05 ~ 1998.01.12	450m ²	町道701号線 拡幅工事
所取遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
成台遺跡	遺物包藏地	中世		土坑		中世陶磁器		なし

越路町文化財調査報告書第25輯

成台遺跡第二次発掘調査報告書

平成17年2月21日 印刷

平成17年2月28日 発行

編集・発行 越路町教育委員会
新潟県三島郡越路町大字浦715番地

印刷・製本 第一印刷所
新潟県新潟市和合町2丁目4番18号
第一和合ビル内
電話 025(285)7161(代表)

